



筑紫女学園大学リポジト

若紫の幼さの陰で：祖母君と源氏

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武谷, 恵美子, TAKEYA, Emiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/725

若紫の幼さの陰で

——祖母君と源氏——

武 谷 恵美子

Behind the Childlike Innocence of WAKAMURASAKI

——Her Grandmother Buddhistnun and HIKARU GENJI——

Emiko TAKEYA

源氏物語における若紫の登場は、可愛らしい言動をとらえて、圧巻である。北山という源氏の生活圏外で垣間見た女子の、無邪気に発する言葉や子供らしい振る舞いは、源氏の過ごす宮中や二条院、左大臣邸では見かけることのないものであり、藤壺への恋慕に苦しむ源氏の心に鮮烈な印象をもたらした。若紫の鮮やかな印象は、源氏の中で固定化して、その後も若紫を無心で幼げであると思いつけているようである。藤壺への恋慕にあえぎ、正妻葵上とはとけあわない冷たい間柄の源氏にとっては、若紫の可愛らしい印象が深く刻み込まれたとしても無理からぬことでもあった。そのような、源氏の目と心を通して幼い若紫が描かれている一方で、一人の少女としての心もきつちりと書かれていることが指摘^①されている。若紫の存在の拠り所であった祖母尼君の死によって、若紫はそれまでのように単に幼く無心ではありえなくなっているのである。祖母尼君の死後は、一少女としての若紫の思いやまなざしが語られるようになり、それは「愛情の飢えにあえぐ姿であった」と石坂晶子氏^②は述べておられる。本稿は、幼さばかりではない若紫が形成されてきた基を探ろうとするものである。

十歳ほどで登場した若紫の人間形成は、どのようになされたのか。誕生後まもなく母君は他界し、父宮は北の方への気遣いから共に過ごすことは殆どなかったであろうから、母君に代わって養育した祖母君に依るところが大きいであろう。母君をまったく知らない若紫にとって、祖母とはいえ、母親と同様な存在であったろう。祖母君も、はやくに無くしてしまつたひとり子の姫君の代わりに、というより姫君（若紫の母）の養育時以上に、不憫さも加わつて孫姫君に深い愛情を注いだにちがいない。母子と同等とも見なされうる祖母君と若紫とのあいだは、どのようであつたか、そして祖母君の養育により若紫には何が伝わつていたのであろうか。祖母君が若紫に残したものの、若紫に祖母君から伝わつたものを読みとり、そのことを通して、若紫の心の動きを見ようと思う。その中で、若紫の第一印象にひきずられてしまふ源氏にも触れることになるであろう。

祖母君の愛と幼い若紫の「さすがに」

まず、北山で源氏が垣間見をして、若紫が登場する場面を引用する。^③

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何ごとぞや。童と腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるころあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。このるたる大人、「例の、心なしのかかるわざをしてさいなまるこそいと心づきなけれ。いづ方へまかりぬる、いとをかしうやうやうなりつるものを。鳥などもこそ見つけくれ」とて立ちて行く。(略)

尼君、「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く」とて、「こちや」と言へばついゐたり。(若紫卷二〇六頁)

この場面において祖母尼君と若紫の関係でわかることは、生き物を飼うことは罪得ることと常々祖母君は教えていたこと、その祖母君の教えにもかかわらず若紫は雀の雛を飼っていたこと、そして犬君が雀の子を逃がしたと言つて若紫は祖母君に走り寄っていること、また、祖母君は命長くはないと自覚して姫君の将来を案じていることなどである。祖母君が日頃から若紫に、生き物を飼うことは仏罰にあたると教えていたということは、この一事にとどまらず生きていく上で大切なことがらをさまざま教えていたであろうと想像される。その教えにもかかわらず、雀を飼っていた若紫は興味に惹かれることが強いのである。そして、祖母君の教えに背いたにもかかわらず祖母君のもとにかけ寄る若紫にとって、祖母君は常にわが味方^④で、自分を全て受け入れてくれる存在であり、その安心感の中で生きていたのである。ところが今日は「あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。」と祖母君は厳しい。それは、「おのがかく今日明日におぼゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ」と長くはない命を自覚し、孫姫君が自分なき後をどう生きることになるのか案じられて仕方がないからである。日頃からの教えを守らない若紫を「心憂く」とつよく情けながることばを吐いてその行為を難じている。が、続いて「こちや」と呼び寄せ、美しい髪をかきなでいつくしむ祖母君は、厳しさとやさしさを合わせ若紫に接している。

祖母君は、髪を梳ることをさえ嫌がる幼い若紫を、なくした娘(若紫の母)の同年齢の頃と較べて、若紫を思う嘆きは深い。

ア尼君、髪をかき撫でつつ、「(略) 故姫君は、十ばかりにて殿に後れたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりぞかし。ただ今おのれ見棄てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とていみじう泣くを見たま

ふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。

生ひ立たむありかもしらぬわかくさをおくらす露ぞ消えんそらなき（二〇八）

同じ年頃で父君に死別した若紫の母君と比べるとはるかに幼く、母のない若紫に不憫さも加わる。先ほどの「おのがかく今日明日にもおぼゆる命をば何とも思したらで〜」との叱りの口調とは変わり、祖母君は髪を撫でつつ若紫をいとおしみながら、この幼さゆえに自分なき後の将来が案じられる心情を吐露せずにはおれない。「ただ今おのれ見棄てたてまつらばいかで世におはせむとすらむ」と口にするや、はげしく泣いてしまう。その発せられたことばと泣くすがたに若紫は「さすがにうちまもりて伏し目になりてうつぶ」すのである。あの幼さばかりのような若紫も、死別を口にする祖母君の顔を見つめそのことばの意味を探り、信じられない思いや不安、動揺に耐えて伏し目になりうつぶしているのであろう。こうしていつになく神妙にうつぶす若紫を見て、祖母君はこの若紫を残して死にきれない思いを歌に詠むのである。このような状況を垣間見ている源氏は、どう感じているのか。姫君の髪を掻き撫でながらことばをかけ「いみじう泣」いている尼君に、「すずろに悲し」くなっている。そして離れての垣間見とはいいながら、若紫については髪がつやつやとみごとに美しいと見ているばかりである。

「さすがに」という言葉は、それ以前に書かれたことからややのみ出た一面を取り出す時に使われる言葉である。「幼心地」の若紫ではあるが、「幼心地」ということではおさまりきらない微妙な一面が、「さすがに」の後に描かれる。「幼心地」のような幼さを表わすことばと「さすがに」がセットになった表現が、若紫について特徴的に存在する。幼さの奥にある鋭敏であったり繊細であったりと微妙な心の動きをする若紫が現わされる。その例は、祖母君在世時のこの例に始まる。雀の子に関わる祖母君と若紫との場面、余命の少ないことを感じ死後の若紫を案ずる情愛に満ちた祖母君の心を若紫が感じ取るこの場面から、幼さに潜む若紫の微妙な心が描かれ始めたとみられるので

ある。このような「さすがに」をもつ例が祖母君の死去以後にも三例見られる。それらの例から、若紫の微妙な心の動きを探るとともに、若紫の心の動きに対して源氏はどのような態度であったかも見えてみる。

祖母尼君の九月二十日死去後、若紫の服喪期間が過ぎて、源氏がその邸を訪れた時のこと。若紫が亡き祖母君を慕い、泣きながら臥していると、直衣を着た人の来訪を父宮だろうと女童が告げるので、若紫は乳母に「直衣着たりつらむは、いづら。宮のおはするか」と聞く。庇の間からその声をかわいいと聞いた源氏が「宮にはあらねど、また思し放つべうもあらず、こち」と言う。思いがけない源氏のことばに、若紫は

イ恥づかしかりし人とさすがに聞きなして、あしう言ひなしてけりと思して、乳母にさし寄りて、「いざかし、ねぶたきに」とのたまへば、「いまさらには、など忍びたまふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。いますこし寄りたまへ」とのたまへば、乳母の、「さればこそ。かう世づかぬ御ほどにてなむ」とて押し寄せたてまつりたれば、何心もなくゐたまへるに、手をさし入れて（二四三）

と幼いながらもさすがに、源氏の声を聞き分け、父宮を期待した言葉を発してわるいことを言ってしまったと思つている。そのきまりわるさから逃げるように、乳母のもとに寄つて、「いざかし、ねぶたきに」と助けを求め。源氏が膝の上で若紫を寝せるといので、乳母は若紫を源氏の方へ「押し寄せ」る。その若紫の姿は、源氏にも乳母にもただ眠たさを訴えるだけの「何心もな」いものとうつつている。というのも、これより以前、北山から京の邸に戻っている尼君を源氏が訪ねた折のこと、「かのいはけなうものしたまふ御一声、いかで」と源氏が若紫の声を懇望するのを、「いでや、よろづ思し知らぬさまに、大殿籠り入りて」と断りの言葉を発したその時に、「上こそ。この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」と若紫が言い、続けて「いさ、見しかば心地のあしき慰みき、とのたまひしかばぞかし」と、「かしこきこと聞きえたりと思して」言い出すということがあつていた。その時、「げに言ふかひなのけはひや、さりとも、いとよう教へてむ」と源氏が思ったのは、わずか一月ほど前のこと

である。少女の変化に気づきえないのももつともであるかのようにも書かれている。この変化は、月日を加えることによつて生じるものではなく、自分の存在そのもののような、生とともにつねに側にあつて情愛を注いでくれた人の死によつてもたらされるものであろう。

しかし若紫のこの隠れた心に気づかない源氏は、御簾の下から手を「さし入れ」る。そうして

手をとらへたまへれば、うたて、例ならぬ人の近づきたまへるはおそろしうて、「寝なむといふものを」とて強ひてひき入りたまふにつきてすべり入りて、「今は、まろぞ思ふべき人。な疎みたまひそ」とのたまふ。(二四

三)

祖母君でもなく乳母でもない「例ならぬ人」源氏が近づいてくるのは「おそろし」く、「寝なむといふものを」と自分の気持に反することへの非難をこめ最前よりもやや強い口調で言い、源氏から離れようと中に逃げ入るが、源氏もいつしよに入つてしまふ。その夜は、「霰降り荒れて、すごき夜のさま」で、祖母君のいない幼い若紫はさぞ心細いであろうと、御帳の中に入りこむ源氏を、

若君は、いと恐ろしう、いかならんとわななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げに思したるを、

らうたうおぼえて (二四四)

祖母君や父宮、乳母、女房以外の人との接触は殆どなく、祖母君に守られてきた若紫は、源氏が今からは自分こそ祖母君に代つてあなたを守る人なのだと言つたところで、「例ならぬ人」源氏へは、肌を寒気をもよおすほどに恐れを抱き、身構えている。そのような若紫を源氏は「らうたく」感じ、若紫がなじむようにとさまざまにやさしく語りかけ、「いざたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」と源氏の自邸に誘う。その源氏の

ウのたまふけはひのいとなつかしきを、幼き心地にも、いといたうも怖ぢず、さすがにむつかしう寝も入らずおぼえて、身じろき臥したまへり。夜一夜風吹き荒るるに、(略)「く明け暮れながめはべる所に渡したてまつら

む。もの怖じしたまはざりけり」とのたまへば（二四五）

とある。「例ならぬ人」源氏への恐れも、源氏の言葉を尽くしたやさしさにすこしやわらいだものの、なお気味悪い
思いで眠ることなく横になっている。こうした、警戒を源氏に気取られないようにと身をひそめる若紫のけなげな
心は、源氏には通じない。源氏は乳母に「もの怖じしたまはざりけり」と口にしてしている。

その後、源氏は若紫を、父宮のもとに引き取られる前に、二条院に強引に連れて来る。二条院の西の対に着いた
源氏は、若紫に合う調度を整えそこで大殿籠もる。この時、若紫は

エいとむくつけう、いかにすることならむとふるはれたまへど、さすがに声たててもえ泣きたまはず、「少納言が
もとに寝む」とのたまふ声いと若し。「今は、さは大殿籠るまじきぞよ」と教へきこえたまへば、いとわびしく
て泣き臥したまへり。（二五六）

と、気味悪く震え今にも泣きそうな気持ちを押さえ、源氏から離れて心のやすらぐ乳母の側で寝たい「少納言がも
とに寝む」とはつきりと訴える。幼いながらも源氏の気持ちを慮り、なお自分の思いを通すための必死の言葉であ
る。しかしここでも源氏は若紫の気持ちをくみ取った気配はなく、若紫の声を「いと若し」と感じているだけのよ
うである。前述したように若紫の声に執着している源氏は、「少納言がもとに寝む」とのかわいい声に感じ入り、若
紫の気持ちを讀みとれないのも当然のような書き方がされているのであろう。そこで源氏は「今は、さは大殿籠る
まじきぞよ」と乳母を引き離して、二条院での新しい生活に入るべく教育することになる。「わびし」い思いを抱き
つつも若紫は「泣き臥す」他はなかった。泣き臥す若紫は源氏をこわがっているのだと源氏は感じながらも素知ら
ぬようにしていたのか、祖母君を恋い泣きしていると思つたのか。それは書かれていない。

かつて、北山から京へ帰ってしまった源氏を、北山の若紫は

この若君、幼心地に、めでたき人かなと見たまひて、「宮の御ありさまよりもまさりたまへるかな」などのたま

ふ。「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、うちうなづきて、いとようありなむと思したり。雛遊びにも、絵描いたまふにも、源氏の君と作り出でて、きよらなる衣着せかしづきたまふ。(二二四)といかにもかわいい様子で、源氏を慕っているようである。すでに祖母君から、祖母君なき後への不安を語られた後のこととはいえ、この時はまだ祖母君の存在で安心感のある「幼心地」の若紫にとって、源氏は自分の生活圏とは別世界の人であった。雛遊びや絵を描くといった空想の世界に存在する人になり得ていただけなのである。現実の生活で関わる人ではなかった。

若紫は、祖母君の在世中と死後とは、明らかに源氏への対し方は違っている。空想の世界にたらなる人、遠く遙かなあこがれの世界の人としての存在ではなく、現実に立ち現れ関わる人となったとき、「例ならぬ人」でしかなかった。源氏が、現実の生活に入り込もうとすることに強い抵抗感がある。懼れや警戒、身構えがあるが、その気持ち、幼く見える若紫は「さすがに」精一杯押さえ込んでいるのである。もともと安心感を要する「寝る」という基本的なことを用いて、若紫の自制と大人の無視とを明らかにしている。このようにわが意を主張しつつも、その意が通じない世界において、若紫は幼さの隠で必死に思いを押さえ、祖母君なき新しい世界をうけいれようとしているのである。

「さすがに」でわずかに現われた若紫の心を、若紫への情愛に満ちた祖母君は見てとってくれた。が祖母君との死別後は、表に現われた幼さの陰で「さすがに」精一杯自制する若紫の心は理解されることがない状況で、一人で反応し順応していかざるをえなかったのである。

霜枯れの前栽

源氏によつて二条院に強引に連れてこられて一夜明けた若紫の様子が、次のように書かれている。

東の対に渡りたまへるに、たち出でて、庭の木立、池の方などのぞきたまへば、霜枯れの前栽絵にかけるよう
におもしろくて、見も知らぬ四位五位こきませに、隙なう出で入りつつ、げにをかしき所かなと思す。御屏風
どもなど、いとをかしき絵を見つつ、慰めておはするもはかなしや。(二五八)

源氏は二条院の西の対に若紫を迎えて、幼い若紫の機嫌をとろうと、絵や遊びものを取りよせなどして、東の対屋
へ去つて行つた。ほつとした若紫は前栽を眺めに出る。そして霜枯れの前栽を「絵にかけるようにおもしろく」感
じている。ここで、若紫は霜枯れの前栽の描かれた絵にこれ以前に接したことがあつたことがわかる。どのような
霜枯れの前栽の絵が祖母君のもとに存在したのか、それは知ることはできないが、若紫は祖母とともに「霜枯れの
前栽」の絵を見たことがあつたのである。絵で見たことのある霜枯れの前栽を、今目前にして「おもしろく」感じ
ている。室内での生活の多い当時の貴族は、このような鑑賞の順序はよくあることである。若紫も外界は知
らなくとも、絵で鑑賞し想像の世界をふくらませていたのだろう。しかも若紫が「霜枯れの前栽」の絵を鑑賞でき
たのは、かなりの絵画鑑賞経験を有していたことの現れではなからうか。そうして、この場面で、若紫はなぜ「霜
枯れ」の前栽に目が行つたのであろうか。「霜枯れ」の用例を検討してみよう。

和歌には「霜枯れの枝と（も古今六帖七四五）なわびそ白雪の消えぬ限りははなとこそ見れ」（後撰集七六）「霜
枯れの草葉をうしとおもへばや」（貫之集二〇）「しもがれのわびしきことはおもへども」（小大君集一二五）「霜枯
れは侘びしかりけり」（和泉式部集四〇六）などからもわかるように、霜によつて草木が枯れる「霜枯れ」は、自然

の美を潰してしまうもので、「わびし」く「憂し」と感じられている。また霜枯れの「かれ」は、ひとの訪れが途絶える「離れ」と掛けても用いられた。高光集には「しもがれのよもぎのやどにさしこもり今日のひかげをみぬぞわびしき」(三二)の歌が「おとどうせたまたのとし新ぬのころ、内にえまらでないしのもとに」の詞書きで詠まれ、父師輔の死でうちしおれている高光の居所を表している。また紫式部集の「霜枯れのあさぢにまがふささがにのいかなるをりにかくと見ゆらん」(九二)(続古今一三七三)は、霜枯れの浅茅の中に紛れ込み存在さえわからなように生き残っているくもに、夫宣孝と死別した紫式部自身をなぞらえている^⑩。

源氏物語の「霜枯れ」の例を見ると、薫と張り合う匂宮を語る部分で

老を忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜枯れのころほひまで思し棄てずなどわざとめきて(匂宮二七)

と「すさまじき」ものとしている。菊も藤袴もわれもこうも霜ですっかりやられてしまう時期まで、匂宮は見捨てない。その残りわずかの草の命を一気に駄目にしてしまう霜は「すさまじき」ものである。

また、葵上の七七日の法事は済ませてもなお正日まで左大臣邸に籠もっている源氏を、葵上の兄弟の三位中将が訪れる場面に、

君は、西のつまの高欄におしかかりて霜枯れの前栽見たまふほどなりけり(葵五五)

とある。源氏は霜枯れの前栽をながめて、なき葵上を偲んでいた。大殿において、美しく咲いていた秋の花々も霜ですっかり無惨にされてしまっている前栽。お産の直前から美しさを見せた葵上の死で傷心に沈む源氏は「霜枯れの前栽」から目が離せないのである。この後、中将が去って、源氏は「枯れたる下草の中に、竜胆、撫子などの咲き出でたるを折らせ」て、葵上の母・大宮に「撫子」をつけて「草枯れのまがきに残るなでしこをわかれし秋のかたみとぞ見る」の歌を贈っている。ここでは葵上の残した子を思う源氏の心が「撫子」を見ているのである。心が

見ようとするものを、目は見るのである。

左大臣邸の源氏も、二条院の若紫も、他の草木ではなく「霜枯れ」の前栽を眺める心境であったといえるであろうか。源氏物語の「霜枯れ」五例の内、二例が「霜枯れの前栽」で、その二例がともに死別をかなしむ人が眺めやっているのである。

源氏が、前栽に竜胆や撫子が咲いていたにもかかわらず、「霜枯れの前栽」を見たように、若紫がのぞいたのは「庭の木立、池の方」であるのに、目にしたものは「霜枯れの前栽」であった。祖母君と死別し、知らぬ邸においてふるえる思いで一夜を明かした若紫の目は「霜枯れの前栽」を捉えたのである。そして「絵にかけるようにおもしろ」と感じているのは、絵に描かれた「霜枯れの前栽」を、祖母君の許でみたことがあったからである。かつて祖母君とたのしんだ記憶をよびおこし、「霜枯れの前栽」を寂しい思いとともに懐かしさも持つてながめたのであろうか。さらに外を眺める若紫は、「見も知らぬ」四位五位の人々の出入りのさまを見ている。見たことのあるものと、「見も知らぬ」ものとを、若紫の目は区別している。また、「御屏風どもなど、をかしき絵を見つつ、慰めておはする」のは、これまた祖母君の許で屏風絵の鑑賞経験があったからこそ、それらになじむのはごく自然に進んだのである。「慰めておはするもはかなしや」とは、昨夜あれほど源氏に抵抗を感じていたのに、一夜明けてはや、源氏の用意した絵^⑬で心が紛れ、源氏の策が功を奏したとは、なんと幼いことよと言いたげな表現をとりつつ、その策が功を奏すには、祖母君の養育に負うところがあることも読みとることができるようになっていたのである。

思いがけない二条院でのくらしの始まりは、幼い若紫の心に軋轢を起こしたが、祖母君から伝えられた、絵を鑑賞する教養が培われていたことよって、あたらしい世界をなだらかに受け入れなじめいでいけたと書かれているように思われる。

手習い

北山を訪れている源氏から和歌を贈られた尼君が、初めて源氏に返歌を書き送ったその尼君の文字を、源氏は「よしある手のいとあてなるを、うち棄て書」(若紫卷二二二頁)いていと見ている。すでに身体も弱り余命が長くはないと感じている尼君は、「よしある手のいとあてなる」筆跡で、無造作にしたためている。「よしある」「いとあてなる」筆跡の持ち主であった尼君は、入内をめざす姫君には手習いの手ほどきを熱心にしたであろう。

孫姫君は、入内など考慮に入りはしないにしても、それでもその母君にしたのに近く教養を授けることは行われたようである。二条院にひきとつた若紫に、手習いを源氏が教えている場面で、若紫の書いた文字を、「故尼君のにぞ似たりける」と源氏は見ている。その書き様が似るほどまでに祖母君からすでに手習いを受けていたのである。源氏が手習い用に古歌を書くところから引用する。

「武蔵野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書いたまへる、墨つきいとことなるを取りて見ぬたまへり。すこし小さくて

ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを

とあり。「いで君も書いたまへ」とあれば、「まだようは書かず」とて、見上げたまへるが何心なくうつくしげなれば、うちほほ笑みて、「よからねど、むげに書かぬこそわろけれ。教へきこえむかし」とのたまへば、うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおほゆれば、心ながらあやしと思す。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば

かこつべきゆるを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん

と、いと若けれど、生ひ先見えてふくよかに書いたまへり。故尼君のにぞ似たりける。いまめかしき手本習はば、いとよう書いたまひてむと見たまふ。雛など、わざと屋ども作りつづけて、もろともに遊びつつ、こよなきもの思ひの紛らはしなり。(二五九)

「武蔵野といへばかこたれぬ」の古歌が、紫の紙に墨つきもとくにすばらしく書かれているのを若紫は座ってじつと見入っている。その目はさらに、小さく書かれている源氏の歌「ねは見ねどく草のゆかりを」を追う。この文の流れには、歌の意味をわがらうと吸いつけられている若紫の視線が感じられないだろうか。若紫にも和歌を書くように勧める源氏には、若紫が「まだようは書かず」と見上げるのをはじめ、その素振りひとつひとつが「何心なくうつくしげ」で「幼げ」で、我ながら不思議なほどに「らうたう」思われてならない。若紫がやっと書いた歌の文字を「生ひ先見えてふくよか」で、「故尼君のにぞ似たりける」と見る。やや古めかしい字なのであろう、今風の字を手本とすれば上達するであろうと期待もふくらむ源氏は、もっぱらその文字に気が注がれて、和歌の内容については一言もなく、関心を示していないようである。若紫は、源氏の和歌の内容への不審をよみ、答歌の形をとる歌を書いている。源氏が専ら手習いのために、しかし藤壺への思いがふき出て危うい歌を若紫に見せたのは、無心で幼い若紫が歌の意味を理解できるとはまったく思っていないからである。だが、若紫は、手習いの文字としてばかりではなく、意味を持つ歌として読んでいる。十分には理解できないながらも理解できる範囲での疑問を歌にしている。^⑭このことは、すでに祖母君のもとで和歌を実作する経験をもっていたことを現わしている。祖母君から若紫が教わった和歌は、ものを感じ、思いを表現し、心を伝えるものであっただろう。早くから清水好子氏が、この源氏の和歌を若紫がどう受け止めているのか疑問を投げかけ、後の紫上の心と照らし合わせることも試みられておられるのが、納得できるのである。しかし源氏は、自分の思いはきだしつつも、若紫の和歌は手習いの文字としてのみ評価し、その歌意をわがらうとはしなかった。藤壺で心がふさがれている源氏にとって、幼くかわいい若

紫はもっぱら「もの思ひの紛らはし」であった。前述してきたように、若紫の内面を見逃している源氏が幾度も描かれていたが、その最たる場面がここである。若紫の初めの印象が深く残り、源氏にとって好都合な心理も無意識に働いているであろうか、その印象を持ち続け、現実の若紫、幼さのなかに潜む忍耐や聡明さは見過ごされている。そのような源氏を作者はここで浮き彫りにしていると思えるのである。藤壺に心が奪われているとはいえ、若紫の登場の巻に、このような源氏が書き込まれていることの意味は大きいのではなからうか。

外見は十歳ほどよりは幼く見える若紫も、祖母君からその年齢にふさわしい教育をうけていたことが、そここで見出され、それらを通して若紫の内面を窺ってきた。祖母君の死による現実の変化の中で、祖母君から受けた手習い、和歌、絵などの教養を通して、彼女の心の動きを見ることができた。また、若紫は幼いとの先入観と藤壺への思慕から、源氏が、それら若紫の心の動きを見落としていることも知られた。若紫のかわいらしさに強く心惹かれながらも、彼女の内面を見落としている源氏が幾度となく描かれているのはどういうことであろうか。源氏は、若紫を藤壺の代わりとして、「おしえ」思う通りに理想の女性に仕立て上げようと志した。若い源氏の目指す、思い通りの理想的な女性に若紫を育てあげようということは、若紫の心の襞をみることなく、出来うるのであろうかとの秘められた疑念を窺わせるようにも思われるのである。

注

- ①石阪晶子「若紫の渴きと屈折―光源氏の欲望の陰で―」『フェリス女学院大学日文学院紀要』第一号一九九九年一月
 ②①と同じ
 ③源氏物語の本文引用は、『新編日本文学全集』小学館による。括弧内に巻名がなく頁数のみは若紫巻である。

- ④ 玉上琢弥著『源氏物語評釈』第二巻昭和四〇年一月角川書店
- ⑤ 「さすがに」はCD-ROM角川古典大観『源氏物語』によると、全用例二六四は四九巻にわたり、最も数多く使用されている巻は、若菜上、総角、手習の一五例である。
- ⑥ ①と同じ
- ⑦ 土佐光起源氏物語画帳には葵巻の「霜枯れの前裁」に続く竜胆や撫子の場面はあるが、「霜枯れの前裁」の絵はない。
- ⑧ 源氏物語「若紫」巻で、源氏が北山で京を見下ろした時に「絵にいとよくも似たるかな」と感嘆している。
- ⑨ 『国歌大観』による。
- ⑩ 紫式部集の九〇番歌と九一番歌は、宣孝と紫式部の贈答歌とする説もある。
- ⑪ ⑦の土佐光起源氏物語画帳の葵巻の絵に描かれている。
- ⑫ 掲出していない二例は、関屋巻（源氏と空蟬の一行が行き会う背景）と若菜上巻（嵯峨野の御堂での紫上の薬師仏供養に参集する背景）
- ⑬ 川名淳子著「若紫の君―絵と雛遊びに興ずる少女―」『むらさき』第二五輯昭和六三年七月では、絵は、現実と空想との架け橋として機能していると云う。
- ⑭ 若紫の歌「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん」については
- ① 森一郎著「紫上の造型（上）―源氏物語の表現と人物造型の関連」『源氏物語の表現と人物造型』二〇〇〇年九月和泉書院、では「若紫が無邪気だから平気でこんな返歌をした」のであって、「彼女は何のことだから分らなかったとすべき」とする。⑬も「手習の域を出ない」とする。
- ③ では「何とも思わなかったのではなく、若紫なりの感想」が歌により込まれているとし「へゆかりへへの疑問と不審」が投げ掛けられているとする。
- ⑮ 清水好子著「『源氏物語』の作風」『論集源氏物語とその前後1』平成二年五月新典社